ヤコブ5章12〜20節「互いのために祈りなさい」

ヤコブの手紙の最後の箇所になりました。この手紙で教えてきたことをまとめるような奨励になっています。

１．誓い（：12）

三つのことを語り始めようとして、とりわけ」誓いのことをまず語るということのようです。12節。誓うこと自体を禁止しているのでしょうか。教会では様々な場面で誓約をすることがありますが、それらの誓いはどうなのでしょうか。

ここで語られていることは主イエスの教えに基づいています。マタイ5章33〜37節。旧約聖書の中にも神、主に対して誓うこと、誓願をすることは様々な場面で出てきます。そして、誓願をしたならば、その通りに果たすことを命じられています（民数記30:2）。けれども、人は誓った通りを果たすことができないことがあります。その言い訳として、神に対して誓うことは実行しなければならないが、それ以外のものに誓ったときには実行できなくても責任を免れる、という考え方が後に出てきたようです。「天」や「地」や「エルサレム」にかけて誓うということです。当時のユダヤ人の中にあったそのようなことをやめなさいと主イエスは教えたのです。

ですから、主イエスもヤコブも、神に誓うことを禁止しているのではありません。そして、誓ったことをその通り行うことは大事なことです。ただ、私たちは自分の力では誓いを果たすことができず、言い訳をすることもあるので、神に助けを求めて祈ることが大事です。

そして、自分のことばに責任を持つようにと教えています。「『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』でありなさい」と言います。この勧めは、事実をそのまま認めることが大事だということ、それ以上に、神のことばに応答することの大切さを教えています。その上で、ことばを選んで責任を持って語り、無責任なことばや行いによって神にさばかれることがないようにと教えています。

みことばに対する応答はいつも「はい」であるべきだと思います。それでも、すぐに「はい」と言えないこともあると思います。みことばによって自分の状態を鏡に映すように示されて、正直に神の御前に自分の状態を申し上げることが大事でしょう。そして、聖霊の助けを祈り求め、みことばにふさわしく応答できるように願い、時には格闘して砕かれることがあって、主の御前にあってふさわしい行動へと導かれるのです。そのような歩みは主に喜ばれ、祝福されるのです。

２．祈りと癒やし（：13〜18）

二つ目のことは、祈りについてです。13節。ヤコブはどんな状況の中でも祈るようにと励まします。13節は詩文の二行詩であるかのようです。苦しんでいる人は祈り、喜んでいる人は賛美するようにと勧めています。賛美は祈りでもあるので、どんなときにも祈るようにと勧めていると言えます。

キリスト者は「苦しんでいる」ときにも祈るべきです。人は苦しみがなくなることを願います。しかし聖書が教えているのは、苦しみの中でも忍耐できるように祈ることです。最善をなしてくださる主を信頼し、苦しみの只中に共にいてくださる主を仰ぎ、やがて報いてくださって意味を分からせてくださる主に期待することで、耐え忍ぶことができるのです。

また、キリスト者は「喜んでいる」ときには賛美し、祈るべきです。喜びが与えられるときには、その要因が色々あるにしても、究極的には神から与えられていることを覚えて、神を賛美し、祈るのです。神が働いておられ、一人一人の生活を導いてくださっていると認めるなら、喜んでいるときも苦しんでいるときも、主を賛美し、祈ることへと導かれるのです。

そのように自分のことを祈ることはもちろんですが、それだけでなく、「祈ってもらう」また「互いのために祈る」ことも大事だとヤコブは言います。祈りは基本的には神と自分との個人的な交わりですが、それだけでなく、心を合わせて共に祈り、それによって主にある交わりを生み出すことでもあります。

14節。使徒の働きや牧会書簡の記述から、教会にはその初めの頃から長老や監督という立場に選ばれた人たちがいたことが分かります。彼らに必要な資質が書かれている箇所を読むと、彼らは霊的に成長した人であったと分かります。彼らは群れの人々を霊的に養い、交わりのために奉仕していたようです。

「主の御名によって」祈ることは、ここでは、病気を癒してくださるのは主であることを強調しているようです。長老たちの祈りに何か力があるということではなく、主に権威があるということです。主のみこころであれば、主が祈りを導き、主が癒してくださるのです。

「オリーブ油を塗って」祈ることの目的としておもに考えられることは二つあります。一つは実際的な目的で、古代では治療に油が用いられたということです。しかし、油がどのような種類の病気にも用いられたのかという疑問がありますし、単に医療的なことであれば教会の長老によってでなくても良いでしょう。

もう一つのことは霊的な意味があるということです。旧約時代、油を注ぐとは神のために人や物を聖別することを象徴的に表しました。油を塗って祈ることで、神の特別の顧みがあるように取り分けたということです。

ただし、オリーブ油を塗って病を癒やすことの意味ははっきりとは分かりません。それよりもこの段落で中心となっているのは「祈り」であることを考えるほうが良いでしょう。15 節に「信仰による祈りは、病んでいる人を救います」とあります。それでも、その祈りに力があるというより、病気を癒してくださるのは主です。「主はその人を立ち上がらせてくださいます」と言われているとおりです。

その後にヤコブは罪の赦しのことを語ります。イエス・キリストによる救いは、霊的にも肉体的にも回復を与える全人的な救いです。それでも、すべての病気が罪の結果ということではありませんし、すべての病気が祈りによって癒されるということではありません。しかし、主は罪を赦してくださいますし、みこころならば病を癒やしてくださいます。そのために祈りを用いられるのです。16 節に「ですから、あなたがたは癒されるために、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい」と勧められています。互いのために祈ることで、罪の悔い改めを促し、信仰による祈りを引き出すのです。

そして、ヤコブはすべての兄弟たちに互いのために祈るように勧めています。「正しい人の祈りは、働くと大きな力があります」と言います。正しい人とは、主を信頼し、主に仕え、主のみこころを求める人と言えるでしょう。その「正しい人」の例としてエリヤのことを挙げています。17〜18 節。アハブ王とバアルの預言者たちと対決するためにエリヤは主によって遣わされ、勝利しました。エリヤは旧約を代表する預言者です。しかし、ヤコブが注目するのはエリヤが「私たちと同じ人間でした」ということです。それでもエリヤの祈りには「大きな力」がありました。それは彼が主によって遣わされ、主のことばを伝え、主に仕えたからです。主のみわざの中で彼は用いられました。

主を信頼し、主に仕え、主のみこころを求める「正しい人」を、主はご自身の御業の中で用います。その人の祈りを導き、祈りに応えるようにして、主が御業を行われるのです。私たちもイエス・キリストによって「正しい人」としていただき、「互いのために祈る」務めを委ねられているのです。

３．連れ戻す（：19〜20）

最後の勧めは、迷い出た者を連れ戻すことです。19〜20 節。ここで言う「真理」とは、教会で宣べ伝えられている福音に含まれているすべての真理ということでしょう。

「連れ戻す」ということばは、まだ信仰に入っていない人に対してであれば、悔い改めてキリストを信じるように導くという意味で理解できます。また、信者であってもつまずいてしまう危険がありますので、そのような者を信仰に立ち返らせるという意味でもあるでしょう。

自分に与えられた主の導き、みことばによって教えられたこと、兄弟によって祈られ励まされたことなどを、他の人のために用いることができます。迷い出た者が主に立ち返るために、また教会の交わりの中で共に主に従う道に立ち返るために、愛をもって仕えるのです。その時に「罪人のたましいを死から救い出し、また多くの罪をおおうことになる」のです。

そして、ヤコブはそのことを兄弟たちが「知るべきです」と言います。人々が救われ、信仰生活を続けることができるのは、神の恵みであり、神の御業です。そのことをしっかり知っていることが、自分自身が真理の内に留まり、他の人たちを真理に連れ戻す行動につながるのです。

ヤコブがこの手紙の終わりにまとめとして勧めている三つのことから学びました。

神の御前に誓うこと、その通りに行うことを大事にしましょう。自分の力によるのではなく神に拠り頼み、みことばを素直に聞いて応答することを意識しましょう。

また、どのような時にも祈りましょう。互いのために祈りましょう。私たちもイエス・キリストによって救われて正しい人とされ、互いのために祈る務めを委ねられているのですから、兄弟姉妹のために祈りましょう。

そして、身近に真理を知らない人、迷い出てしまっている人がいるなら、その人を連れ戻すために奉仕しましょう。そのために私たちのことばや行いが用いられるように意識しましょう。